

日本記者クラブ会報

北村氏を理事長に再任

副理事長は君和田、小林両氏

第62回総会

第400号
2003年
(平成15年)
6月10日発行

〒100-0001
東京都千代田区幸町二ノ二
日本プレスセンタービル
◎社団法人 日本記者クラブ

ことはクラブ役員の変更期で
す。第六十二回の総会が五月二十
三日に開かれ、第十六期の役員が
四ページの通り決定しました。

早速、新しい理事・監事による
理事会がもたれ、執行部が決定し
ました。理事長には北村正任・毎
日新聞社常務取締役主筆が再任さ
れました。北村氏は、杉田亮毅氏
が日経社長に就任のため三月に理
事長を退いた際、後任に選任され、
第十五期の残余期間、理事長を務
めました。

総務委員長 門田衛士(共同)

会員資格委員長 滝鼻卓雄(読売)

企画委員長 宇治敏彦(中日)

会報委員長 住田良能(産経)

施設運営委員長 田村哲夫(テレ
ビ東京)

なお、三期六年専務理事として
クラブのため尽力した那部吉正氏
が退任し、事務局長の岩崎が専務
理事を兼務することになりました。
また総会では〇二年度の事業報
告と決算が理事会案通り承認され
ました。会費収入は三百万円弱の
マイナスでしたが、会員のみなさ
んの施設利用が増え、事業収入は
それを上回るプラスでした。支出
面での節約もあり、約四千万円の

当期剰余でした。クラブ財政は日
下のところ健全です。

クラブ賞の贈賞式も

二年ごとに行われてくる改選期の
五月総会の日は、いつも華やくだ
ものになります。新役員が誕生し
た総会の席上、日本記者クラブ賞
の贈賞式も行われました。

受賞者の田城明・中国新聞社特
別編集委員はご夫人同伴でした。
田城記者は、二十世紀の所産であ
る「核」問題を、世界的視点から
取材し、外から見たヒロシマの意
味と課題をみつめた企画記事を多
数連載しました。被爆地の記者と
しての志に支えられた、その仕事
が評価されました。
記念講演は、東大の山内昌之教
授、ホットなテーマで「イラク戦
争と国際社会―日本の選択」。二
百人を超える出席者でした。二
夕刻からの会員懇親会がなかで

も最大の盛り上がりでした。北村
理事長のあいさつ(20ページ)の
後、壇上に上がったクラブ賞の田
城さんに大きな拍手が起こりまし
た。実業高校を出て新聞配達を経
た後、中国新聞の販売局発送部、
三十三歳で編集局報道部へ、三
十九歳で米タフツ大学フレッチャ
ー・スクール大学院修士課程修了
という経歴に、目を見張った方も
多いのではないのでしょうか。

クラブ賞の選考委員会でも、田
城さんを育てた中国新聞社にも敬
意を表したいという意見がありま
したが、会場の会員の一部分からは
こんな声も聞かれました。「ご本人
の努力、才能はもちろんだが、ほ
かの世界でなく自由で闊達な報道
界だからこそということにもっと
みんな自信をもつて、ジャーナリズ
ム活性化の契機にすべきです」。
山内教授も遅くまで残られ、会員
との意見交換を楽しんでいました。
前専務理事の周りには「ご苦労さ
ん」と労をねぎらう会員が集まり、
那部さんも「D会員の仲間入りをし
ます」と、カミシモをとって杯を重ね
ていました。(専務理事・岩崎玄道)

2003年度 日本記者クラブ賞

驚き、喜び、感謝、憂うつ。四月三日に本年度の日本記者クラブ賞に内定したとの連絡を受けて感じたことを言葉に表せばこうなるだろうか。「驚き」は、むしろ、地方紙を通じて記者活動を続けてきた私のような「無名」のジャーナリストが、「全国区」で活躍する先輩・同輩の優れたジャーナリストを差し置いて、このような栄えある賞を受賞できるなどとは思ってもいなかったことである。

「候補者が十一人もいるそうだよ」。二月だったか、私を推薦してくれたわが社の今中亘社長から立ち話で聞かされた。「受賞の可能性はないのだから何人いても同じです」と、間違っても期待などしないでほしいとの思いで、そっけない言葉を返した。その後は、本の出版とイラ

ク情勢絡みの執筆などに追われ、正直、内定決定がいつあるかも知らずにいた。

「おめでとう」。社内の幹部らから声をかけられ、ようやく受賞を実感し、すなおに「喜び」もわいてきた。意外な結果への単純な喜びである。

しかし、喜びの中心には、少なからず「安堵」にも似た部分も含まれていた。というのも、被爆国の政府首脳から「核兵器保有」や「非核三原則の見直し」発言が公然と飛び出すご世に、人類史における「広島・長崎の被爆体験」の意味や、核時代の「負の遺産」の実態について追求して

くじけず勇気をもって

田城 明

(中国新聞特別編集委員)

きた私の一連の作品を評価してくれる選者がなおいた、ということへのホッとした思いである。

喜びにはまた、「被爆新聞社」として戦後一貫して取り組んできた原爆・平和報道が評価されたのだ、との思いもまじっていた。原爆で社員の約三分の一の百十三人を失い、戦後の苦しい時代に先輩たちが真摯に「ヒロシマの意味」を問いつけ、書き続けてきたその蓄積の上に、私の仕事もあるからだ。

「感謝」の思いは、そうした先輩たちへのものである。と同時に、核時代に警鐘を鳴らし、世界平和に果たすヒロシマの役割を自覚した「社」としての持続的な取り組みの中で、関連取材を継続的に担う



ことを認めてくれた社のトップや同僚らへの感謝でもある。そのうえで憂うつ…。

内定の知らせを受けたときは、国連憲章や国際法を無視した米英両国によるイラク戦争の真つただ中。ミサイルや誘導爆弾などのハイテク兵器に加え、放射能兵器の劣化ウラン弾まで公然と使用していた。しかも、小泉政権は道義に欠けたその戦争を明確に支持してもいた。

私が抱いた「喜び」や「感謝」の気持ちは、イラクに目を向けるだけで「憂うつ」に覆われた。今回の受賞は、そんな憂うつを払いのけて、これからも「くじけず、勇気をもって歩み続けよ」との励ましを受けとめている。

たしろ・あきら 一九四七年生まれ 兵庫県淡路島出身 七二年中国新聞社入社 販売局発送部員を経て 八一年編集局報道部 八七年米国防立大学フレッチャー・スクール大学院修士課程修了 編集委員 原爆・平和・国際担当部長などを務め 二月から現職 主な著書に「核時代 昨日・今日・明日」「知られざるヒロシマ 劣化ウラン弾の実態」「核超大国を歩く」(七月刊行予定) など

会員懇親会 (5.23)



この日の総会で専務理事を退任した那部さん(左)「ご苦労様でした」と産経の先輩、阿部穆さんが労をねぎらう



「クラブ賞おめでとうございます」——田城夫妻(中央)を祝福する増田れい子さん(右)と坂本宏さん、諸岡達一さん(左から)



出席者は160人 同僚、先輩、後輩……社の枠を越えて懇談の輪が広がりました



あいさつの後乾杯の音頭をとる北村理事長



中東和平と米外交についてジャーナリストティックで刺激的な講演をしてくれた山内東大大学院教授にお礼を述べる小林副理事長(右)



松山幸雄さん(右)と語り合う村上紀子さん、有馬真喜子さん、藤原房子さん(左から)

第62回 通常総会

五月二十三日(金)
クラブ宴会場

社団法人日本記者クラブの第六十二回通常総会は、出席法人会員四四社、委任法人会員八二社、計一二六社の出席をもって成立(定足数七五社)、定款二十三条により北村正任理事長が議長となり開催された。

二〇〇二年度の事業報告(前号添付)、同収支決算ならびに繰越収支差額の処分を、別記(5ページ)の理事会案通り承認した。続いて第十六期の役員選任に移り、役員選出委員会の提案通り理事二十九名、監事三名を決定した。この後、総会は一時休憩となり、新役員による理事会が別室で行われ、別掲のように理事長、副理事長、専務理事、各委員会委員長が決定した。再任された北村理事長が、理事会の結果を総

会に報告し、三期六年専務理事を務め退任した那部吉正氏に感謝の言葉を述べた。あいさつに立った那部前専務理事は、次のように会員社の代表にお礼を述べた。「大過なく務められましたのは、みなさまのご協力のおかげです。在任中の一番の思い出は、三十周年パーティーに陛下をお迎えできたことです」。本年度のクラブ賞受賞者の田城明・中国新聞社特別編集委員への贈賞式も行われた。

第十六期役員(二〇〇三・二〇〇四年度)

*役職は五月二十三日現在

◇理事長

北村 正任(再) 毎日新聞社常務取締役・主筆

◇副理事長

君和田正夫(新) 朝日新聞社専務取締役・編集担当

小林 昂(再) 日本テレビ放送網取締役執行役員専務

◇専務理事

岩崎 玄道(新)

◇理事・総務委員長

門田 衛士(新) 共同通信社専務理事・編集総本部長

◇理事・会員資格委員長

滝鼻 卓雄(新) 読売新聞社東京本社専務取締役

総務・広報担当

◇理事・企画委員長

宇治 敏彦(新) 中日新聞社取締役・編集担当兼

スポーツ紙担当

◇理事・会報委員長

住田 良能(再) 産経新聞社専務取締役・総括主筆

◇理事・施設運営委員長

田村 哲夫(再) テレビ東京専務取締役

◇理事

島田 昌幸 日本経済新聞社常務取締役総務

天野 岩男 時事通信社常務取締役業務・事業・マスメディア担当

村田 正敏 北海道新聞社東京支社長

村田 正敏 西日本新聞社東京支社長(役員待遇)

恒川 昌久 信濃毎日新聞社取締役東京支社長

小山 敬雄 山陽新聞社東京支社長

永橋 正至 高知新聞社東京支社長

塩越 隆雄 東奥日報社取締役編集局長

江頭 潔 長崎新聞社東京支社長

又江原 裕

関根 昭義

岡元 隆治

大戸 宏

宮地 正美

志村 義奉

村瀬元一朗

千葉 寛城

村上 重美

玉川 寿夫

佐藤 嘉男

◇監事

高野 信之

田中 忠

辻塚 邦男

ジャパンタイムズ専務取締役主幹兼編集局長

日本放送協会専務理事・放送総局長

東京放送報道局長

フジテレビジョン常務取締役

全国朝日放送報道情報局報道企画部報道企画専任局長

関西テレビ放送取締役東京支社長

中部日本放送取締役東京支社長

東北放送常務取締役報道制作局長

日本新聞協会専務理事

日本民間放送連盟専務理事兼事務局長

日本プレスセンター専務取締役

京都新聞社東京支社長

岐阜新聞社取締役東京支社長

九州朝日放送東京支社長

2002年度収支計算書

自 2002年4月1日
至 2003年3月31日

科 目	予算額	決算額	科 目	予算額	決算額
支出の部			収入の部		
1. 事業費 (243,115,000)	(229,293,361)		1. 会費収入 (393,059,000)	(390,317,500)	
借室維持費 (187,970,000)	(187,022,236)		(1) プレス会員会費 (330,206,000)	(328,697,900)	
借室料 [111,230,000]	[111,229,644]		法人会員会費 219,055,000	218,524,800	
共益費 16,640,000	16,639,944		個人A会員会費 29,476,000	29,546,100	
空調・光熱・水			個人B会員会費 2,380,000	2,442,800	
ホール専用利用費 [50,000,000]	[50,000,000]		個人C会員会費 14,565,000	13,907,700	
会議費 3,985,000	2,494,836		個人D会員会費 64,730,000	64,276,500	
事業運営費 24,672,000	18,786,460		(2) 賛助会員会費 (62,853,000)	(61,619,600)	
会報発行費 16,300,000	13,620,653		法人賛助会員会費 50,076,000	49,434,000	
運営雑費 1,542,000	913,896		個人賛助会員会費 6,441,000	6,001,600	
通信費 3,826,000	3,678,777		特別賛助会員会費 6,336,000	6,184,000	
印刷費 3,560,000	2,616,863		2. 事業収入 (68,844,000)	(72,053,834)	
交通費 1,260,000	159,640		(1) 貸室収入 41,694,000	43,056,655	
2. 管理費 (181,598,000)	(174,991,516)		(2) 飲食売上割戻し収入 23,229,000	23,181,229	
(1) 人件費 (149,426,000)	(150,262,611)		(3) 施設機器賃貸収入 3,921,000	5,815,950	
給与 88,489,000	89,558,236		3. 雑収入 (667,000)	(1,269,048)	
賞与・諸手当 58,937,000	59,575,041		(1) 預金受取利息		
厚生費 2,000,000	1,129,334		(普通預金、退職資産準備)	340,000	801,200
(2) その他の管理費 (32,172,000)	(24,728,905)		(2) 雑収入 327,000	467,848	
クラブ管理費 23,124,000	17,916,827		【一般会計収入計】 (462,570,000)	(463,640,382)	
機器備品費 1,500,000	606,679		4. 特定預金受取利息 (155,000)	(337,542)	
消耗品費 3,200,000	2,705,695		(1) 増加賃料積立預金 63,000	220,775	
事務委託費 3,436,000	2,769,339		(2) 特別積立預金 47,000	33,908	
事務雑費 912,000	730,365		(3) クラブ賞積立預金 45,000	82,859	
3. 諸引当金への支出 (60,000,000)	(60,000,000)		5. 入会金 (0)	(1,180,000)	
(1) 退職準備積立預金 20,000,000	20,000,000		6. 特定預金取崩収入 (0)	(629,558)	
(2) 資産準備積立預金 10,000,000	10,000,000		(1) クラブ賞積立預金 0	629,558	
(3) 増加賃料積立預金 10,000,000	10,000,000		【特別会計収入計】 (155,000)	(2,147,100)	
(4) クラブ賞積立預金 20,000,000	20,000,000		当期収入合計(A) 462,725,000	465,787,482	
4. 予備費 (17,857,000)	(0)		前期繰越収支差額 70,382,030	70,382,030	
【一般会計支出計】 (502,570,000)	(464,284,877)		収入合計(B) 533,107,030	536,169,512	
5. 特定積立預金への支出 (155,000)	(1,517,542)				
(1) 増加賃料積立預金 63,000	220,775				
(2) 特別積立預金 47,000	1,213,908				
(3) クラブ賞積立預金 45,000	82,859				
6. 諸積立金からの支出 (0)	(629,558)				
(1) クラブ賞積立預金 0	629,558				
【特別会計支出計】 (155,000)	(2,147,100)				
当期支出合計(C) 502,725,000	466,431,977				
当期収支差額(A)-(C) -40,000,000	-644,495				
次期繰越収支差額(B)-(C) 30,382,030	69,737,535				

次期繰越収支差額処分

2002年度決算の結果生じた次期繰り越し収支差額69,737,535円のうち、2,000万円を増加賃料積立預金に、19,355,505円を退職準備積立預金にそれぞれ積み増し、30,382,030円を次期に繰り越す。

貸借対照表

2003年3月31日現在

科 目	金 額	
I. 資産の部		
1. 流動資産		
現金・預金	51,565,040	
未収入金	7,764,084	
立替金	12,622,353	
前払金	12,493,217	
仮払金	200,000	
流動資産合計		84,644,694
2. 固定資産		
内装設備	20,442,872	
什器備品	6,900,510	
敷金	32,271,109	
保証金	55,342,000	
退職準備積立預金	201,611,355	
資産準備積立預金	224,168,415	
増加賃料積立預金	100,553,956	
特別積立預金	70,366,406	
クラブ賞積立預金	79,859,832	
固定資産合計		791,516,455
資 産 合 計		<u>876,161,149</u>
II. 負債の部		
1. 流動負債		
仮受金	1,073,400	
預り金	0	
未払金	13,833,759	
流動負債合計		14,907,159
2. 固定負債		
退職給与積立金	201,611,355	
資産準備積立金	224,168,415	
増加賃料積立金	100,553,956	
特別積立金	70,366,406	
クラブ賞積立金	79,859,832	
固定負債合計		676,559,964
負 債 合 計		<u>691,467,123</u>
III. 正味財産の部		
正味財産		184,694,026
(うち当期正味財産増減額)		(- 4,965,500)
負債及び正味財産合計		<u>876,161,149</u>

□ 会議報告 □
第321回企画委員会

(5・13 宴会場)

新委員の村松泰雄朝日新聞論説
副主幹(旧・住川治人氏)と中井
康朗読売新聞論説委員(旧・清本
修身氏)を紹介した後、今後のゲ
スト選考について検討した。
出席 君和田委員長、村松、山田、

橋本、中井、永野、小池、
矢島、菅沼、春名、金重、
鳥居、神志名、迫田、羽生、
元田、和田、村澤、川内、
福沢の各委員。

第309回会員資格委員会

(5・14 シルバールーム)

六月一日付の会員入退会を審議

し、理事会に答申した。
出席 門田委員長、神徳、瀬戸、
岡崎、塚越、深澤、村神、
田中、船田の各委員。

第149回施設運営委員会

(5・15 小会議室)

前年度、四月のアラスカ売り上
げと貸室利用状況を事務局が報告

した後、ラウンジ入り口の丸テー
ブルを時間を限りメンバーズ用に
することを決めた。
出席 田村委員長、広上、山田、
岡井、田村、榊原、中原の
各委員。

第242回会報委員会

(5・16 小会議室)

五月号について意見交換した
後、六月号の編集方針を協議した。

出席 住田委員長、小川、尾崎、
仙石、中山、元田、堀内の
各委員。

第380回理事会

(5・23 大会議室)

出席 北村理事長、君和田、小林
の両副理事長、岩崎専務理
事、滝鼻、島田、天野、宇
治、村田、桃、恒川、小山、
永橋、塩越、江頭、又江原、
佐藤、関根、岡元、宮地、
田村、村瀬、玉川の各理事。
高野、田中、辻塚の各監事。

岩本 愛吉 東京大学医科学研究所教授

▼院内対策が重要

「なぜ日本でSARS患者がないのか」。この質問に岩本教授は「運がいいだけでしよう」と答えた。しかし、ここまで「時間かせぎ」ができたことの意義は大きい。当初「なぞの肺炎」と言われたこの病気の事態が、驚くべき早さで解明されつつあるからだ。

香港で集団感染が報告されたのが三月十二日。約一カ月後には病原体が新型のコロナウイルスであることが判明。世界各国にウイルスが伝ばした経路もわかってきた。

こうした研究成果を紹介しながら岩本教授が強調したのは院内対策の重要性だった。シンガポールや香港で、病院内で感染が拡大していったデータを示し、「ベトナムで鎮圧に成功したのは最初の病



5.8 (木) 研究会
「SARS」
司会 宮田一雄 委員
出席 169人

院内で感染をとどめることができただからだ。残念ながら、中国では、一カ所で患者の拡大を防止するという意味で対応が後手後手に回ってしまったようだ」と語った。

ただ、ウイルスの増殖を抑える方法はまだない。香港で「効果があつた」とされた抗ウイルス剤リバビリンについても、米疾病対策センター(CDC)の見解を紹介しながら、「少なくとも実験ではウイルス抑制に効果がないようだ」と話した。回復した人の血清を利用する方法も「効く可能性はある」としながらも、血液型の違いや他の病気を感染させる恐れから「簡単にはできない」と言った。

「感染者べつ視につながる報道を危惧している」と言つて、メディアに対する注文も忘れなかった。この原稿が出るころに日本でもSARS患者が出ていてもおかしくない。パニックになつていないことを祈りたい。

朝日新聞科学医療部

行方 史郎

生田 正治 日本郵政公社総裁



5.9 (金) 益食会
司会 天野岩男 理事
出席 永野健二 委員
94人

▼庶民の虎の子「安全運用」

明治四年の郵便創業から百三十余年の歴史を持つ郵政事業。その業務を引き継ぐ「日本郵政公社」の初代総裁に就任して一カ月。「郵便局は何も変わっていない」との声もあるが、職員意識は良い方向になつてきた。

全国約二万四千七百局の郵便局、約二十八万人の職員を率いる。海運大手、商船三井会長から小泉首相の懇請で転身したが、早くもすっきり郵政事業に溶け込んでいくようだ。従来の縦割り組織に本部制導入で横系を組み込み、シナジー効果が発揮できるようにしたり、風通しをよくしようと、若い職員を集めて対話もはじめた。「郵政事業はいつてみれば金融業と物

流業を合わせ持つサービス業。この現実を認識することが重要だ」と、機会あることに職員に向けて企業経営で培ったノウハウを発信する。そのせいか、改革に前向きな提案がどんどん出るようになった。「いいアイデアはすぐ実行」が総裁方針だから、すでに翌日配達エリアの拡大や、一部コンビニへのポスト設置など新たな施策が次々打ち出されている。郵政三事業のうち、郵便事業は年間三百億円の赤字だが、四年間で黒字転換させる。ここきて政府部内に株式市場活性化を目的とした郵貯、簡保資金の活用

論が浮上している。「郵貯、簡保とも庶民の虎の子で、安全な運用が至上命令。安易な運用論は戒めねば」ときっぱり反論した。「どんな難題にも真っ向から取り組む心意気、決意だ」という「真っ向サービス」を宣言した生田総裁、郵便局を本当に変えられるか―真価が問われるのはむしろこれからである。

日本工業新聞論説委員室長

北野 靖志

イラク問題

④～⑦

が、停戦後イラクに対して国連安保理の停戦決議687（大量破壊兵器の廃棄）の順守を繰り返し求め、警告してきた。「イラクが国

アラブ人の間で激しい反米感情が高まっていた時、「イラク戦争は百人のビンラディンを生むだろう」と語ったムバラク大統領の言葉は、いまだ記憶に生々しい。アラブ随一の親米国エジプトは、今どういうスタンスに立っているのだろうか。カレム大使は「和平こそエジプト外交の礎だ。だが歴史的経緯からみて戦争を招いたのはイラクだった」と言う。「フセイン大統領の愚かな過ちは一九九〇年のクウェート侵攻に始まった」。当時エジプトは多国籍軍に参加した



委員 誠司 島井 人
5.9 (金) 矢長 78
司 会 通 出 席

▼カイロが対話の場

—マハムード・カレム
エジプト大使

連査察に無条件に従わなかったため戦争になった。しかし戦争が終結した今、「イラク問題は再び国連の場に返すべきだ」と大使は強調する。

戦後、カイロにイラクの対立するグループが話し合いに来ているという。「エジプトは対話の場を提供できるアラブ唯一の国だからです」と語る大使の言葉に、一九七八年イスラエルとの単独和平に踏み切った暴力の連鎖を断とうとした故サダト大統領の自負が伝わってきた。

▼IAEA査察受け入れ

—アリ・マジエディ
イラン大使



委員 朗子 井由 人
5.16 (金) 中森 61
司 会 通 出 席

「残酷なフセイン政権の崩壊は喜ばしいことだ」とマジエディ大使は繰り返し語った。「イラク戦争で得をしたのは米国、損をしたのは仏露」とも。「国連無視の先制攻撃は国際秩序を破壊し、アナ

キー状況が生まれて、かえって民族的宗教的な過激主義が広がるだろう」とは述べたが、予想されたアメリカ批判は抑え気味だった。

ブッシュ政権から「悪の枢軸」と名指しされているイランにとつて、いま最大の焦点は「核開発疑惑」であろう。この点について大使は、「ロシアから核燃料の提供を受けているし、独自に原子力開発の研究もしている。しかしこれは電力や医療など平和目的のためであり、どの国にも認められていることだ」と言い、さらに「核兵器をもたないことがイランの明確な政策であり、透明性のためにIAEAの査察・管理を受け入れる」と語った。また、「北朝鮮との親密な関係」の噂をきっぱり否定し、イランはNPT（核拡散防止条約）加盟国だと強調した。二十年以上国交断絶の対米関係については、二年前からアフガン問題で両国は接触しており、対話のパイプがあることを示唆していた。

個人D会員（NHK出身）

内田 義雄

▼再建は国連の傘の下で

—ヘンリック・シュミーゲロー
ドイツ大使



委員 グナ ワ 桂 子
5.19 (月) W 一 石 61
司 会 通 出 席

「すっかり忘れてしまった」といいながらも時折日本語の交じる話し方は柔らかなだが、内容は論理的で明確だった。イラク戦争が必要だったのかについては異論があるとしながらも、いまは過去の違いを蒸し返すときでなく、国際社会全体が戦後再建に取り組むべきだと、ドイツの考え方を説明した。緊急課題の治安と秩序の維持は、占領軍である米英両国の責任だが、戦後再建は全体として国連の傘の下でなければ考えられないという考え方である。

そのなかでイラク問題でも日独両国がアフガニスタンの際と同様の役割を果たすことは可能だと指摘した。

冷却化した米独関係については「本質とは無関係のエピソード」

シリーズ 研究会

と楽観的だったが、プッシュシユ米政権の態度からみると、それほど簡単ではなさそう。独仏関係についても質問が出たが、具体的な答えはなかった。

イラク戦争への不参加を貫いたのは、憲法上の理由によるものだと詳しく説明したのは、ほとんど報じられていなかった点だけに、印象的だった。アフガン戦争と違って、連邦議会の承認が得られる可能性は全くなかったという。

▼軍事、経済より政治優先で

ベルナル・ドモンフェラン
フランス大使



委員 男子 幹事 名宅 人 (水) 春三 64 21 会 通 出 席 5

今年一月に続き、わずか四カ月の間に二度目の登場となった。前々日のドイツ大使とは立場に大きな違いはないのだが、フランス人らしく堂々と論理を展開する話し方は対照的だった。

イラク問題に入る前に欧州と関係が深い中東全体に対するフランスの基本的考え方を説明した。法、正義、公正の優先、マルチ形態のアプローチと並んで、軍事、経済より政治を優先しないと成功しないと説いた点が印象的だった。世界の投資額の〇・五%しかアラブ・中東に向けられていない事実を指摘して、テロの温床である中東の近代化、発展に力を入れる必要を強調した。

イラク問題では国連が中心的な役割を果たすべきだという主張はこれまでと変わらないが、早期の国家主権回復、民主国家建設、中東地域の安定への貢献という、戦後の目標実現のためにそれが必要だとあらためて説明した。

拒否権行使を明言した姿勢は硬直していたのではないかというやや挑発的な質問には、多くの理事国の支持があったので拒否権を行使する必要はなかった、フランスには多くの国、多くの国民の支持があると自信たっぷりに答えた。

個人D会員(共同通信出身)

秋山 民雄

重村 智計 拓殖大学教授

▼ミスターXを解き明かす

研究会の冒頭、重村氏は「何度目にしたことのある写真ですが」と前置きして、一枚の写真を回覧させた。昨年九月の日朝首脳会談で、小泉首相と金正日総書記が机越しに向き合っているおなじみのものだ。よく見ると、金総書記の左隣に座る通訳の横が空席にもかかわらず、机上にはメモ用紙と鉛筆が置かれている。何やら意味ありげな、と思っただけであらためて見ると、重村氏は「会谈の頭撮りを終えたカメラマンが退出した後、この席に座った男こそ、ミスターXです」と謎解きして見せた。

ミスターXは北朝鮮の最高指導機関「国防委員会」の事務方のナンバー2で、金総書記の側近と断言された。ミスターXについては諸説あるが、こうまで断定されると、妙に納得してしまう。参加者は一気に「重村ワールド」に引き込まれてしまった。

重村氏とは、氏が毎日新聞の論説委員だった当時から、社の垣根を越えて、朝鮮半島問題についてご教示いただいたことがある。通説を一刀両断してみせる説得力は鋭さを増しているようだ。この日も、「来年の米大統領選挙が終わるまで、米国は九九%北朝鮮を攻撃しない」「北朝鮮は追い詰められても暴発しない」といった「論」を次々と展開した。

今、北朝鮮は「核保有発言」にまでどう喝外交をエスカレートさせている。日米韓は衝突を回避する策を見いだせるのか。それを考える上で貴重な九十分だった。

読売新聞解説部次長

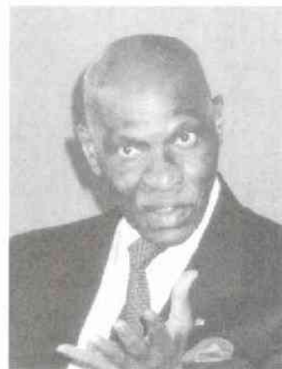
勝股 秀通



研究会 (水) 14 5 「北朝鮮」 ⑦ 委員 渡辺 興 二郎 165 人 出席 司会

ク ラ ブ ゲ ス ト

アブドゥラエ・ワッド セネガル大統領



▼開発会議との協調を目指す

アフリカ西部の国セネガルの名を聞いてまず思い出すのは、昨年のサッカーW杯における大活躍だろう。首都ダカールとパリを結ぶ過酷なラリーも有名だ。

だが、もちろん、それだけではない。セネガルは戦乱や内紛に苦しんできたアフリカ大陸にあって、民主的な国づくりを進めてきた穏健なイスラム国家としても名高い国である。

そのセネガルからアブドゥラエ・ワッド大統領が五月中旬、日本を公式訪問した。帰国直前の十五日には締めくくりの記者会見を日本記者クラブで行った。

先進諸国によるアフリカ支援では「アフリカの開発のための新パ

ートナードシップ」(NEPAD)の活用が重要な課題になっている。と同時に、日本の音頭とりで始動したアフリカ開発会議(TICAD)も援助国と被援助国の意見交換、利害調整の場として、活用のあり方が問われている。

ワッド大統領は、NEPADとTICADが互いに補完し合う形でアフリカにおける開発支援に役立てていくことが大切との認識を示し、九月に東京で開かれる第三回TICADで新たな協調を目指す考えを明らかにした。

政府からの支援と共に、「アフリカの労働コストは安い」と、民間企業による投資の拡大に期待を寄せた。アフリカで生産し、輸出できるものを増やしていくことで、「平和や安全も担保できる」と技術移転の必要性を強調した。

朝日新聞論説委員

吉田 文彦

5・15(木)記者会見 司会 田村哲大理事 通訳 白井久代 出席 48人

山内 昌之 東京大学大学院総合文化研究科教授

▼イラク戦争後の中東情勢

総会記念講演(「イラク戦争と国際社会―日本の選択」)の講演者に山内教授を招いたのはまさに適切だった。現代の中東・イスラム社会を語らせて、その視点の厳密さ、また示唆性において右に出る研究者はいない。

教授はこの講演で、イラク戦争後の中東情勢新展開のキーポイントとしてシリアのレバノン占領解消問題を挙げた。このこと自体、教授の視点の示唆性を示すが、加えて、戦争終結直後シリアを訪れたドビルバン仏外相がシリア軍のレバノン撤収を求めたことを取り上げ、おおむねこう語った。

「フランスは非常にずるい。イラク戦争前、外交経験がまだ十分

とはいえないバッシュヤール・アル・アサド大統領を反米へと使そうしていったのは、ほかならぬフランスだった。そのフランスが今度はシリアをまた一つの手ごまのようにして、その犠牲に立って、自分は傷つかずに(シリア軍のレバノン占領終結を望む)アメリカに再接近する」

日本の新聞もドビルバン氏のシリア訪問はもちろん取り上げた。しかし、こうした視点から、外交の意図を解説できた。中東ジャーナリストは果たして何人いたろうか。そして、「フランスは非常にずるい」という教授の簡潔かつ辛らつな仏外交評価。この発言に、講演出席者の多く(あるいは一部?)は胸の内で大喝采を送ったに違いない。

中東ジャーナリスト・個人D会員(読売新聞出身)

藤原 和彦

5・23(金)総会記念講演会 司会 北村正任理事長 出席 208人



クラブゲスト

朴寛用 韓国国会議長

▼盧政権の現実路線を評価

北朝鮮が核保有を宣言し、韓国の盧武鉉政権も当初の融和政策から核開発阻止を優先する政策にかじを切り始めた。朴寛用議長は盧政権が現実路線を選択したと評価するが、核問題の解決は簡単ではないと憂慮も示した。

朴議長は北朝鮮が核開発を放棄するシナリオとして、①経済支援など大きな利益が得られると判断した②イラク攻撃のように米国の軍事行動が近づく③経済制裁や海上封鎖が実施され、経済の苦境がいつそう進む——の三つの状況が想定されると説明した。米国には見返りを与える考えはなく、北朝鮮も体制維持のため簡単に核を手放すとはみられず、「対話が進展



5.29 (木) 昼食会
司会 田村哲夫 理事
小池洋次 委員
通訳 崔允実 韓国通訳官
出席 81人

しなければ、今秋には緊張がかなり高まるだろう」という。だが、米国が軍事的な圧力をかけ続けられ、朝鮮半島に戦争が起きる可能性も排除できない。北朝鮮と同族である韓国としては、戦争は絶対に避けたい。「韓国はもちろん、北朝鮮の脅威に直面する日本も、米国と北朝鮮双方さらには中国に對して、あくまで外交による解決を促すべきだ」と繰り返し強調した。

野党ハンナラ党に所属する朴議長は金大中前政権が進めた太陽政策には批判的だが、北朝鮮への強硬策には慎重な姿勢を崩さなかった。核開発の阻止を最優先しながらも、米国の軍事行動の可能性を憂慮し、北の住民にはコメや肥料など人道支援をすべきだと述べた。この発言に、武力衝突や北朝鮮の急激な体制崩壊による混乱だけは避けたいという、当事者としての苦悩をにじませた。

東京新聞外報部

山本 勇二

米国はどう変わり、そして世界をどう変えようとしているのか——。同時多発テロ以降、この点がますます鋭く問われるようになってきました。米国は一段と「単独主義」に傾きつつあるようにもみえます。アフガニスタンやイラクで誇示した圧倒的な軍事力を背景に「新たな帝国」の道を歩み始めたとの指摘も少なくありません。いまこそ、米外交の本質を見極めるときで

●新研究会「米外交の行方」

しょう。さもなければ、日本など世界各国は国益を守ることすら危うくなるかもしれません。それほど、米外交は大きく重い意味を持っているのです。まずは「ネオコン（新保守主義者）」と呼ばれる集団の画像を把握し、さらに米国の朝鮮半島政策を見極めたいと思います。来年の大統領選も視野に様々なテーマを取り上げる予定。是非、ご参加を！

企画委員

小池 洋次

熊田さんの温容—— 新聞記者という激しい職業を続けてきて、どうしてこういう温容が保てるのだろうか。二月の誕生日で七十九歳になられた。口の悪い人は、汚れ仕事をしてこなかったからだろう、ということかもしれないが、果たしてそうだろうか▼十階のレストランのソファで、おとき話から抜け出てきたようなご夫妻が、相客待ちをしていた。パリ在住の熊田亨さんだった。年に一度か二度、気候のよい時分に帰国すると、きまってクラブレ

ストランを利用する▼翌夕、熊田さんは歴代のクラブ賞受賞者の一人として、会員懇親会（5・23）にも出席した。会場で昔の仲間たちと旧交を温め、宴の後も牟田口義郎さん、増田れい子さん、諏訪正人さんらとラウンジの丸テーブルで、九時ごろまで語り合っていた。ブッシュと中東がらみの話に花が咲いたのだろうか▼熊田さんの温容には、教養の広さと深さだけでなく、ユマニスムとエスプリの香りが関係しているのかも。（玄）

書いた話 書かなかった話

「核は持ち込まれていません」

「絶対オフレコ」の秘話 後日譚



堀越 作治

及に対しても「事前協議の申し入れがない以上、持ち込まれていない」と苦しい建前論で逃げているのが現状なのである。それを、こともあろうに前外相が認めたとは、と思

っただけでも胸が高鳴った。記事にした場合の政府のあわてぶりと世論の反響が、目に浮かぶ。一時間半に及んだ話が終わると、私は出所を明かさなから何とか記事にさせてほしいと頼んだ。すると木村氏は「だから絶対オフレコとお断りしたでしょう。もし漏れたら私の政治生命はおしまいだし、あなたとも絶交です。そして、全面否定の談話を出します」といった。さらに、他言も一切お断りします、とまでいうのである。仕方なく私は国会記者会館に走って、聞いたばかりの話を細大漏

それは、政治部の朝刊デスクを終わった翌日の一九七五年五月十七日（土）のことである。約束により前外相の木村俊夫氏を赤坂東急の事務所に訪ねたところ、珍しく秘書にも入ってこないようにいつけてから「まあ、ちょっと聞いてくださいよ」と切り出した。そして、いきなり飛び出したのが「佐藤さんはひどいエゴイストですよ」という強烈な親分批判だったのには、びっくりした。まさか、佐藤元首相に最も近い人の口から、こんな文句が出てこようとは、想像もつかなかったからである。

しかし、それよりもっとびっくりする話が、田中前首相との関連で出てきた。わざわざ「絶対オフレコですよ」と二度も三度もだめ押ししてから、木村氏は「実は核は持ち込まれているんですよ」と打ち明けたのだ。

私は、思わず飛び上がった。「核は作らず持たず持ち込ませず」の非核三原則のうち、「持ち込ませず」は怪しいというのが、たしかに世論の大勢になりつつある。とくに前年秋、アメリカでラロック証言（注）が出てからは、その傾向が一段と強まってきた。しかし政府としては、度重なる野党の追

ここで、そのメモ帳から要点を再現してみよう。木村氏は、半年前に退陣した田中前首相について「金脈問題はともかく、政治家としての実行力には敬服していません」といい、そのうえで次のような内幕を漏らしたのだ。

「あのラロック証言でクロージアップされた核持ち込みは、実は本当です。また、核を積んだアメリカの艦艇は日本の領海内を通過しています。あの証言をもとに野党から突っ込まれたら、今年の通常国会は大荒れして、政府は立ち往生したかもしれません。」

そこで、私はこう考えたんです。だれの目にも明らか核持ち込みを、さようなことはないというのを、つくるのは耐えられないので、これまでの事実関係はともかく、今後は一部の核持ち込みを認めるといふ交換公文をアメリカと交わそうとしたんですね。

野党の抵抗はあるでしょうが、ウソをつき続けるよりはいいし、いざとなれば私は腹を切る覚悟でした。田中総理にも話したら、よし、やってくれというので、すぐ東郷君（事務次官）に命じてアメリカと折衝させたんです。向こうもOKしたので内々の話し合いの結果、草案ができたんですが、幸か不幸か田中内閣があいいうことになり、本交渉に入らないうちにご破算になってしまったのです。おかげで、私も命拾いをしたわけですが」

◇
それから六年後の一九八一年五月十七日、ライシャワー元駐日大使が「核積載艦の日本寄港は二十

一年前から了解済み」と語り、日本政府に大変な衝撃を与えた。

政府は早速、ラロック証言の時と同じように否定の談話を出したが、事前協議制が虚構であることは隠しようがない。とくに大使が指摘した「introduction」は陸揚げ、貯蔵なので持ち込みになるけれども、もうひとつのtransitは寄港、領海通過だから、持ち込みにならないと了解ができていた」という点は、きわめて具体的である。

木村氏のいった交換公文は、このiransitのことだと判断したので、私はすぐ電話を入れ、何としても書きたいとお願いした。

たまたま「朝日ジャーナル」のデスクから、ライシャワー発言に関連して寄稿を求められたところでもあったので、私の観測記事として出すことにし、文中に「木村元外相は口を閉ざしているが」とカムフラージュすることで折り合いがついた。苦渋の選択である。

十日ほどたったころ、兵庫県読者から怒りの手紙をもらった。

私が文中に「核持ち込みの日米折衝については六年前に情報を得ていたが、その元政府関係者から『絶対極秘』を約束させられたので、今日まで書けなかった」と断っていたのを、「国民の重大事である記者の判断で秘匿するとは」というのである。一言もない。

すぐ、お詫びの返事を出した。しかし同時に、取材先との信義がわれわれにとつていかに大事であるかを訴えたところ、その点についてはよくわかった旨の返事が来た。

それからさらに五年後の一九八六年八月、核搭載の米戦艦「ニュージャーシー」が佐世保へ入港する騒ぎが起きた時、木村氏はすでに亡くなっていたので、私は夫人に事情を話し、すべてを本紙に出すことにした。八月二十四日付に載った

「核搭載米艦船の寄港 日米いったん非公式合意」

「持ち込みは事実 木村元外相生前明かす」というのが、それだ。

この時も外務省は「そんな記録はない」と否定したが、日米安保条約の事前協議制が虚構であることを改めて告白したものに他ならない。真実は、木村証言の通りなのである。

それにしても、木村氏はなぜ漏らしたのだろう。恐らく、国民を欺かない努力をした政治家が少なくとも一人はいたことを、だれかに知っておいてもらいたかったにちがいない、と今は思う。

（注）ラロック証言 一九七四年九月十日、ジョン・R・ラロック米退役海軍少将は米議会で証言し「核兵器を積載する能力のあるすべての船は、核兵器を積んでいる。それらの船が日本などの港に入る時も、核兵器を外すことはない」と述べた。

ほりこし・さくじ会員 一九三〇年生まれ 労働省婦人少年局 アメリカ大使館勤務を経て、五六年朝日新聞入社 政治部次長 福岡総局長 東京編集局次長（財）森林文化協会常務理事などを務める

書いた話 書かなかった話

ワーキング
プレス

中国記者たちも感染

▼福島 香織

(産経新聞北京特派員)

五月十四日、日本政府が派遣した国際緊急援助隊のセミナー取材で、防護服を着ることになった。セミナーではSARS患者と日々接している医療関係者が密室に集まる。念のため、

というわけだ。手渡された日本製の防護服セットのバックには、高気密ポリエチレン製の白いつなぎの防護服やマスク、プラスチックの防護眼鏡などが入っている。「これ、いくらするんですか?」と聞くと、隣で着替えていた講師の医師が「四千五百円くらいですかね」「使い終わったら?」「デイスポ(廃棄)です」。念のための安全に三百円相当を使い捨てる。ああ、

もつたいない、と瞬間的に思っ
て、この感覚が中国人的だと気付いた。日本人なら、命を守るために万全の対策をとることの価値を疑いはしない。SARS取材で中国人の命に対する価値観の違いを
実感した。

例えば院内感染。四月二十日、中国当局が患者数を大幅上方修正し、情報公開に踏み切った。五月に入ると、中国報道にも院内感染の内幕ものが出はじめ、総患者数の一八%が医療関係者という深刻な院内感染が、情報や医療物資の不足という理由だけでないことが見えてきた。

四月五日―二十三日で院内感染者を九十三人出した北京大学人民病院院長は五月十八日、中国中央テレビ(CCTV)に出演し、次のように語った。「二十一日から

二十三日まで(外来患者)八千三百六十三人を診療し、その多くに点滴を行った。医師は感染症の専門知識がなく、狭い病室でつぎつぎ診療し、感染が広がった」。

患者でこった返す診察室が目につかぶ。八千人の中には普通の風邪の患者もいただろう。この時期、すでにSARSに関する情報は各病院に通達されていた。営利や病院としての体面を、スタッフや患者の安全より優先させたとしか説明がつかない。

最前線を取材する中国メディアも同様だ。CCTV記者らの間で感染者は十数人にのぼると聞く。患者の女性記者は「私はSARS取材現場に出たことはないが、同僚からうつつたようだ」と社内の二次感染を打ち明けた。北京の感染拡大が見えはじめた四月初旬、産経新聞を含む外国メディアは高機能マスクを取り寄せ、人ごみでの取材はマスクを着用した。中国メディアは「感染は抑制された」と主張する当局の意向にしたがい、当初何の防護もしていなかった。国営メディアに情報収集や防

護品を支給する能力がなかったというより、取材コストや中国の体面を優先させたのだろう。

弾が飛んでくるわけではない。身の危険を具体的に感じるわけではない。窓の外はさわやかな初夏の日。危険などないと思えば、無視できる。ふだんから事故や災害で人があまりに大量にあっけなく死ぬ中国では、毎日報告されるSARS死者数も、ことさらに深刻だと意識しにくい。この国で人の命はスベアのきく安価な労働力で、中国にとってSARSは最初から経済問題だった。

五月二十五日、中国の新規患者数は十六人と目に見えて下火になり、人々はSARSによる経済ロスをばん回することに神経を集中しはじめている。命や安全を軽んじたことへの本格的な検証がなされないまま、次の段階へと進む中国にこの先、何が待ち受けているのか。中国暮らしに慣れて私自身が命や安全の価値に鈍感にならないよう戒めつつ、取材を続けていきたい。

ふくしま・かおり 一九九一年入社 大阪
本社社会部 香港支局などを経て、二〇〇
二年から現職

試写会『スパイ・ゾルゲ』

自分史を重ねての鑑賞

大留 明夫

(個人会員 日経出身)

篠田正浩監督が国際スパイ・リヒャルト・ゾルゲ」という怪物に惚れ込み、構想十年。その活躍を描くことで、いみじくも舞台となつた軍国日本の、敗戦までの昭和史を活写した。製作費二十億円の超大作。

ゾルゲの研究者で、製作に協力した日露歴史研究センター代表の白井久也氏(個人会員)は「篠田は調べに調べ、ゾルゲ部分の原稿だけでも八回も書き直した」と、ドキュメンタリー作家の執着と勉強ぶりを語っていた。

共産主義世界を夢見るダンディ・ゾルゲは、祖国に尽くすが、女を愛し、酒を愛し奔放に生きる。独大使をだまして情報を取り、夫人まで寝取る一方で上海の妻を想い、スパイ活動で傷つけた相手に心から詫げる男でもある。

配役では当然ながらゾルゲに扮する主役イアン・グレンが抜群。

脇役ではスメドレー役の混血児ミア・ユーがいい。宮城与徳役の永澤俊矢、検事役の椎名桔平などの好演を、ベテラン、友情出演者がバックアップして豪華だ。

この人たちが活躍する場景を最新のデジタルハイビジョンカメラHD 24Pが追う。合成された記録映像の背景は鮮明。戦前の銀座四丁目の街角、市電、街頭写真屋：など懐かしい風景を再現する。

一方、昭和史を彩る記録資料の活用は、まさに篠田監督の真骨頂。出征、隣組、配給、竹やり訓練、金属回収、B29の上空襲、焼け跡、敗戦、闇市、進駐軍……。使用映像は当時、映画館で見たニュース映画の一コマ、一コマである。

二・二六事件では剣付き鉄砲で

家の前を行進する麻布三連隊の兵士。「兵に告ぐ」に続く一連のラジオニュース。すべてが、私の実体験であり、自分史の一頁をひもとくようで懐かしい。

三時間の上映時間は苦もなく過ぎた。記者クラブでの昼夜二回上映は吉永小百合の「長崎ぶらぶら節」以来。入場者は六百人に達したとか。会員の関心の高さは記者OBが生きてきた時代の映画だったからだろう。

結果として違和感はなかったが、この映画は変わっている。日本映画なのに日本語の字幕が出てくる。主役が外人だから会話の大



半が英語。尾崎秀実役の本木雅弘も愛人役の葉月里緒菜も英語。これは日本製作の外国映画だ。

映画はドイツ敗戦の緒となる「日本参戦せず」の情報をキャッチして祖国ソ連を救い、連合軍を勝利に導いた国際スパイ・ゾルゲを描くのに忠実で、日本はゾルゲ活躍の舞台に過ぎず、尾崎秀実も協力者の一人ではない。

「愛情は降る星の如く」などに示された尾崎の姿がないので戦前戦後を生きてきた日本人の私には、やすやすとゾルゲに協力する尾崎に「国を売る」おぞましさが消えない。戦後世代は単にジェームズ・ボンドの日本版として楽しめるだろうか。

「フィクションより真実の方がおもしろい」「夢があるから生きられる」という篠田正浩。昭和二十五年春「早稲田に入った」と息を弾ませていた時と同じように、君の眼は輝いている。次作を夢見てくれ。

*二・二六事件での「兵に告ぐ」のアナウンスには、個人会員の吉岡晋也氏が声の出演をしています。

◇個人D会員

プロフィール

五月一日付入会の個人D会員、法人・個人賛助会員、特別賛助会員の方々です。



『英語現場』

鈴木康雄 (読売新聞出身)

日本の「英語力」が弱いのはなぜか？

英語教育が大学入試時にピークになるよう設計され、「英語を学習」し、「英語で学習」しないからだ。先進国では、英語・英文学部を除けば、大学には英語教員はいない。早急に、英語で授業を行うことだ。モノリンガルでは生きていけない。だが、バイリンガルはむずかしい。日本語一〇〇%、英語七〇%の「イナリンガル(二・七)」をめざそうと提唱した。海外を含め、取材をもとに論じた。

(三元社 二、〇〇〇円)

『果てしなき論争』

仲 晃訳 (共同通信出身)

先に米国内外で爆発的な論議を呼んだマクナマラ元米国防長官の『ベトナム戦争回顧録』の完結編。

前者では、米国が泥沼戦争にのめり込んだ経緯を率直に告白して衝撃を生んだが、本書では米、ベトナム双方の当事者がハノイで交わした白熱の対話を忠実に再現し、戦争の悲劇を繰り返さないよう二十一世紀への政治的遺言としている。多角的なオーラル・ヒストリーの新手法を活用した歴史認識の新しい試みが見どころである。

(共同通信社 三、八〇〇円)

ハ法人会員代表変更

日本経済新聞社

(新) 杉田 亮毅

代表取締役社長

(旧) 鶴田 卓彦

ダウ・ジョーンズ経済通信社

(新) ケン・マカラム

東京支局長

(旧) ウィリアム・マラード

札幌テレビ放送

(新) 白石 重昭

代表取締役社長

(旧) 石橋 雄哉

会員の著書 (寄贈していただきました)

騙されやすい日本人

(新潮文庫 五一四円)

宮脇 磊介会員

写真

写真 内藤 博

(1991年産経新聞入社 大阪本社を経て 96年)
から東京本社写真報道局 阪神大震災 ペル
ー日本大使公邸人質事件 アフガン戦争など
を取材



(朝霞市・荒川秋ヶ瀬橋付近 5.4)

タマちゃんの独り言

ご存知、北海のはぐれアザラシ「タマちゃん」です。

私が関東地方の河川調査に参上してから、はや十カ月がたちました。多摩川から荒川へと五つの川をめぐるうち、日本人についてもいささか観察したので、以下所見の一端を述べさせてもらいます。

一つ。最近の日本人は、ほめ言葉の語いが不足してませんか。何を見ても「カワイイ、カワイイ」の連発には、正直いつてウンザリ。タマにはお得意の片仮名語で「セクシー」ぐらい言っほしいネ。

次に気に障るのが「カワイソウ」ってやつ。優しい気持ちはわかるけど、よく確かめないとお節介になるヨ。

私を北の海に送り返せとか、釣り針を抜いてやれとか……。その前に私の意見はきいたのかって言いたいネ。

それから驚いたのが、日本人の太平洋さ。隣には北朝鮮みたいな物騒な国があるし、新型肺炎はすぐ水際まで迫っているし、ついこの間なんか、全国五位の金融グループが実質倒産して経済はお先真っ暗だし。

それでもメゲないで私をもてはやしてください。日本の人たちは、危機感が薄いんじゃないか、肝っ玉が据わって居るのかもしれない。もう少し日本にいて、様子を見ようかしら……。

(堀内 敏宏)

北村理事長のあいさつ(要旨) わたくし自身のことをお話しするのは大変失礼で、恐縮なのですが、ぜひやはり最初に申しあげさせていただきますことがあります▼それは、アンマン空港で起こった爆発事件のことです。あの写真記者を管理、指導する立場にあるわたくしとしましては、重い責任を感じておりまして、日本のジャーナリズムの信頼を傷つけたことについて、みなさまに深くお詫び申しあげたいと思います。(再任への感謝・中略)▼いまマスコミを取り巻く状況は、改めて申すまでもなく大変厳しいものがあります。社会の

変化は旧来通りの新聞、旧来通りのテレビというものの安泰を許さない状況になっていきます。しかし、どのような事態になりましても、健全なジャーナリズムがこの国に存在するということの重要性が失われることは決してないと思います▼そして、ジャーナリズムが毅然としてこの国に存在するための一番基本的な条件は何かと考えたとき、その仕事に携わる一人ひとりの力量、情報量、見識がしっかりしていることです。そのことのために、日本記者クラブに課せられている役割は大きいと思います(5・23 会員懇親会で)。

八月の貸室料は一律三五%引き
 プライベートな会合にご利用を

八月は例年通り、貸室料金を一律三五%引きにします。各社の利用が少ない時期です。で、個人会員や賛助会員の方々の個人的な会合に有効に使っていただくごとの措置です。お問い合わせは三五〇三―二七二四へ。

招待券

朝日新聞社から「わぎの美 日本伝統工芸展」、中日新聞社から「ワイルドスミス絵本の世界展」の招待券をいただきました。お礼申しあげます。

●五月号で六月末に会見予定とお知らせした、ジャクソン元米国原子力規制委員会委員長の来日が秋以降に延期になりました。

訃報 青木克之会員(日本経済新聞出身)が四月二十九日、白石泰資会員(日本新聞インキ社友)が五月二十日に死去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

「マイBook マイPR」は、18ページに掲載しました。この欄では、会員社や会員のみなさんの新刊書を紹介しています。自著のワンポイントPRを二百字程度でお寄せください。

クラブの電話

(ダイヤルイン)

- ・和食レストラン(9階) 3503-2723
- ・洋食レストラン(10階) 3503-2766
- ・貸室予約 3503-2724
- ・受付、宴会打ち合わせ 3503-2721
- ・クラブ行事への申し込み 3503-2722
- ・会員事務 3503-2725
- ・経理 3503-2728

六月の行事予定(4日現在)

- 12日(木) 午後2時〜3時30分 研究会
 「HIV/エイズ」⑬ 橋本修
 二・藤田保健衛生大学教授
- 20日(金) 午後3時〜4時30分 研究会
 「北朝鮮」⑧ 倉田秀也・杏林大
 学総合政策学部助教

(行事案内電話)〇三―三五〇三―三七六四

会員現況 法人会員 一四九社 基本会員

- 八一人 個人会員 一、七三二人 法人・個人賛助会員 八一社 二一人 特別賛助会員 六六人 名誉・功労会員 一二人
- 計 一三〇社 一、八三五人

会報委員会

- 委員長 住田良能
- 委員 小川津根子 尾崎美千生 仙石伸也
 中山司朗 堀内敏宏 元田成
- 連絡 長谷川和子 本庄五月
- (電話) 〇三―三五〇三―二七五二
 (FAX) 〇三―三五〇三―二七二二